



〈紹介及批評〉油本豊吉氏著『外國貿易政策』（第一卷）

松井， 榮一

(Citation)

国民経済雑誌, 64(1):141*-144

(Issue Date)

1938-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00055287>



較方法の三者につき検討して、これを一圖表に纏められてゐる(四八一頁)。次いで經營比較の前提として、比較

障害の除去及び比較資料の統一化を論ぜられ、以下、經營比較の内容を貸借對照表比較(成果比較を)・原價比較・

標準經營比較に分つて論攻される。ここに標準經營比較は標準價値と過去價値との比較として最も經營統制に効果的なる形態なるが故に、特に論ぜられたのであるが、前

二者が財務比較・成果比較・原價比較の分類に従つて説明されないのは、本書の構成に照應して期間計算・單位計算なる分類に則られたためである。最後に第四節では今日なほ未開拓分野たる經營統計が扱はれてゐる。ここに經營統計とは以上述べた比較計理以外の比較計理の領域を言ふのであり、一般統計とは方法的には全く同様であるが、その目的従つて比較資料に於て異なるものとして

性格付けられてゐる。従つて經營統計の目的及び資料について論述され、またその種類として、教授は内部經營統計(財務統計・業務統計・製造統計)と外部經營統計とをあげられる(五六八頁)。即ち、ここでもまた經營統

計が經營統制手段たる性質をもつに省みて、經營の職能領域に照應した分類が考慮されてゐるのである。

以上、極めて概要のみの紹介に終つたが、併し讀者は、これによつても、本書の内容が經營計理の全領域に及び、且つ體系化が如何にも全編を貫いて緻密に整然と成功してゐるのを窺ひうるであらう。經營計理論の最初の單行本たる本書は、また將來に於ける斯論研究の確固たる一大礎石たることを、筆者は信じて疑はない。

(經營學全集第九卷、東洋出版社發行、本文菊版五六八頁、定價 前・後篇 各貳圓) (丹波康太郎)

油本豐吉氏著

『外國貿易政策』(第一卷)

このたび商業政策第二部として刊行された本書ならびに今後引續き上梓せらるべき續卷は、教授の舊著『外國貿易理論』(商業政策第一部)(昭和七年刊)と姉妹篇をなし、相共に教授の商業政策體系の有機的な一部分を構成

する(序一頁、なほ、教授の商業政策體系については、『外國貿易理論』序一頁參照)。「著者の腦裡を絶えず來往せる「外國貿易政策」の全編制」は六編二十七章に及ぶ浩瀚なものであるが(序一—四頁參照)、本書にはそのうちの第一編「緒論——外國貿易總説——」の前半二章、すなはち、第一章「外國貿易の概念——貿易論上の國家概念——」および第二章「外國貿易の構成」が收められてゐる。いま、昭和十一年の夏以來教授が「經濟學論集」誌上に隨時發表された諸論文に、「幾多の改訂と増補を行ひ、これに若干の新稿を附加して成つた」(序九頁)本書を、改めて一讀再讀、卷を閉ぢて靜かにその所説を反芻するに、まことに興味の深々たるものがある。

第一章は貿易の概念規定論或は方法論に關し、第二章は筆者が私かに貿易動態論ないし現象論と名づくるものに當る。これらはいづれも貿易政策の「緒論」をなすのみならず、また貿易理論の前提たるものである。すなはち體系的には、貿易理論と貿易政策とを包括せる「貿易論」(序五頁參照)の冒頭に置かるべきものであらう。

教授は貿易論上の國家概念をば「有機的統一體としての國際的經濟單位」と規定される(序六頁、本文三四頁以下)。そして外國貿易とは、主體的には「有機的統一體としての各別の國際的經濟單位に屬する諸々の個別經濟相互間の通商」の謂であり(七九頁)、また客體的には、「國際間における價值受渡」と理解される(序八頁、本文七九頁、一八八頁)。その際教授は、「國民經濟といふ言葉を避けて、殊更「國際的經濟單位」といふ表現を採用したことを強調される(三六頁)。それは、國民經濟は通常多かれ少なかれ緊密に結び附いてゐる諸々の個別經濟の綜合」と理解されるが、國民經濟をこの意味において使ふならば、同様の意味において「地域的または地方的」國民經濟といふことも出來れば、また反對に、「獨・塊の」國民經濟、「日・滿の」國民經濟、更には「ドナウ沿岸諸國の」國民經濟、「中歐の」國民經濟などいふことも出來、進んでは世界經濟においても個別經濟間の結合性或は相互依存關係が見出されるからである(三五—三七頁、なほ五〇—五一頁參照)。

教授のこの見解は、國民經濟なるものが政治的評價により決定されとなし、またこれを一の綜合經濟とのみ理解するハーバラー(G. Haberler, *Der internationale Handel*, 1933, S. 5—6)と、全く符節を合するものである。しかしながら、國民經濟が歴史的に生成せるものにして、近世的統一國家の基礎の上に成立したものである以上、「國民經濟」概念に「統一國家」概念は不可欠なものであり、政治的色彩の故に排斥さるべきものではない。また、國民經濟の歴史性に着眼することなく、これを單純に綜合經濟の一種と看するのみにて、國民經濟の本質を把握しえたりといふことはできない。それ故に、我々は今なほ「國民經濟」なる概念標識を捨て去り難く思ふ(この點に關しては他の機會に詳論したい)。それはともかく、教授が「右の概念を適用して、近き將來更めて貿易理論を展開」(序七頁)されんことこそ、我々の切願してやまないところである。

第二章においては、いはゆる國際收支を構成する諸項目が詳論される。その際まづ行はれる外國貿易統計に關

する論述は、本章の隨所に見られる多くの精密なる統計的・實證的敘述とともに、たしかに本書の一特色たるを失はない。さて、國際經濟交通の主要項目を形成するものは純粹の商品貿易であるが、これに關聯して教授は、工業國對農業國の貿易、農業國の工業化の問題等について、注目すべき論述を行はれる。前述の如く、外國貿易を國際間の價值受渡と理解される教授は、純粹の商品貿易以外の「見えぬ輸出入」殊に國際資本移動および貨幣的國際支拂を重視される(一八七一—一九〇頁、序八頁參照)。

しかしながら、その故を以て、古典學派の自然的物々交換を以てする貿易機構の解明方法、或は、商品は必ずや商品をして支拂はざるを得ないとの主張を正しからずと斷定する(一九〇頁)ことはできない。けだし現象的敘述と純粹理論的思考とは別問題であるから。ところで、「見えぬ輸出入」に屬するものうち、「一方的價值移轉」についてはハーバラーに従へる極めて概論的記述しか行はれてゐないのは、教授の右の見解に顧みて、他の部分と均衡を失してはゐないだらうか。また「資本の受渡」に

についても、戦後における事情の解明のほかに、ヨリ一般的な所説の展開が望ましく思はれる。

以上は單に筆者一個の望蜀に過ぎない。本書はわが貿易學界のこの分野における從來の缺陷を補ふて餘りあり、その學問的水準を著しく高めたものといふべきである。また、各章節の終りに附せられた参考文献は「著者にして出來得る限り、一方弘く涉獵すると共に他方嚴に取捨し大いに骨折つて作製」(七八頁)されたものであるから、本書に論及された諸問題を更に詳しく研究せんとする者にとつて有益なことはいふまでもない。最後に、我々は本書續刊の速かならんことを念願し、教授の健筆を祈らう。(菊版、本文三四三頁、巖松堂發行、定價貳圓五拾錢)

(松井 榮一)